

最後まで堤清二でいてほしかった

水野誠一

かつての上司であり、人生の恩師でもあった堤清二さんが突然逝ってしまった。

清二さんとの出会いは些か運命的なものだった。私が未だ高校生の頃、通学路を遠回りしてしばしば立ち寄るほど不思議な魅力を感じていた店が西武百貨店池袋店だったからだ。必ずしも「百貨店」に興味があったわけではない。「西武」に興味があったのだ。そこは、他の百貨店が未だ気付きもしなかったニューアカデミズムの文化を体現している稀有な店だったし、百貨店以上の何者かに必ず進化するだろうという予感もあった。だからそれ以来、この革新的な経営者に興味を抱き、いつか堤清二という人の下で働いてみたいという思

いを持つていた。その結果、大学のゼミの指導教授が「百貨店に就職したいのなら、何故、三越や伊勢丹に行かないのだ」と止めるのを振り切つてまで、自ら飛び込んだのが西武百貨店、つまり堤清二という経営者の下だった。その関係はカリスマ経営者と勝手に夢見る生意気な新入社員という出会いから始まり、二五年後、相前後してその精神的な依り代だったセゾングループを去るときまで続いた。

清二さんの逝去を伝える報道は、もっぱら最近の顔である辻井喬という視点から紹介するものが多かった。堤清二という名前が往々にして過去形で語られ、辻井喬という名前が現

在形で語られることが多いことから分かる。

だが清二さんの真骨頂は、単なる流通業経営に留まらず、セゾン文化なるものを発信し、かつてあり得なかった「生活総合産業」という業態を創造しようとして試みたことにある。当時は時期尚早にも思えた概念だったが、これが今日の流通文化の成熟化への刺激となったことは明らかだ。

決して過去の成功体験に溺れず、絶えず自己否定を繰り返していき、さらに負の遺産を逆説的に利用して成功させるのが「堤清二的経営哲学」だった。

広告表現も単なる流行への迎合としてではなく、文化的な読み替えを伴う高度なメッセージとして発信することが求められた。一世を風靡したコピー「おいしい生活」(糸井重里)がそれを代表している。

一九七五年の池袋店の大改装では、最上階に本格的な美術館「西武美術館」を設置した。その数年前に池袋店の催事場で「ルノアール展」を開催して大きな入場者数を記録したことがあったが、成果を報告した幹部に対して清二さんが「それは借り物の成功であり、自らが生み出した成功ではない」と言ったことがあった。その意味では、美術館も真の生活文化を生み出すための装置のひとつでしかなかった。この様な

「広義の生活文化」への拘りこそがセゾン文化の本質だった。

こうして清二さんが長年築き上げたセゾン文化は、彼の退場とともに脆くも崩れ去ることになる。後を引き受けた経営者達の、「普通の企業に回帰する」という一言で崩壊が始まったと言ってもいい。文化という魔法のレンガを積みあげるのは数十年も掛かるが、壊すには一瞬でこと足りる。

不幸だったのは、幹部の大半が清二さんの敵しさを畏れるあまり、その発想を真に理解し消化してから実現することができなかったことだ。それによって表層的に「文化」の衣を纏っただけの事業拡張を徒に急ぐことになった。

そんな革新的な事業挑戦をすればするほど、彼にとって大きな重石だった亡父・堤康次郎への愛憎半ばする思いや、彼自身の真意を理解出来ない幹部への苛立ちが、清二さんの中で錯綜していたはずだ。そんなとき、自ら逃げ込む先が詩人であり作家でもある辻井喬というもうひとつの人格だったのだろう。まさにそれは気を静め新たな創造に導くために必要なシェルターでもあった。だが当時の私には、そういう逃避も露骨的な内容も、何か痛みを感じる辛いものに映っていた。だから、その後セゾンを去り、二つの人格を使い分ける必

要が無くなってからの辻井喬が書く小説のテーマや文章がずっと深く穏やかなものになったと感じたとき、何故かホッとしたものだ。

しかし勝手なもので、同時に一抹の寂しさを感じていた。

「あの改革者として敵しかった堤清二は何処に行ってしまったのだろうか？」と。

ところが最後に一度だけ堤清二に戻った瞬間があった。従来一線を描いていた西武鉄道グループから、創業家の歴史的存在意義が次第に消去されてしまいそうな現状を見て、家長としての立場から創業家の株の実態を巡る訴訟を起こしたときだ。自ら創造したセゾングループとは違って、西武鉄道グ

ループは父・堤康次郎が残したものだから、他の兄弟のための闘いとも言えた。この家長としての自覚は、それまでの堤清二のイメージとは大分異なるものだったが、これこそが本来求められていた姿だったのかもしれない。だが最高裁にまで持ち上がった訴訟は決して簡単なものではなく、最終的な結論が出ないまま清二さんは逝ってしまった。

私としては、最後まで堤清二でいてほしかった気がする。だが清二さんにとっては、辻井喬として人生を終わることが最後の夢だったのだろう。堤清二としては十分すぎるほど長く闘い続けてきたのだから。

（みずの せいいち・株式会社I・M・A代表取締役／元西武百貨店社長）